千葉・茨城地区
馬のあゆみ 上

競走馬の情報から観光案内まで「千葉・茨城」の魅力をご案内いたします。

競走馬のふるさと千葉県案内所は、名馬に会いに来るファンの方や観光で馬産地を訪れる方のために、さまざまな情報のサービスを行う競走馬のインフォメーションセンターです。競走馬のこと、名馬の居場所、牧場見学など、お気軽にお問い合わせください。また、案内所には牧場地図、競走馬に関する資料も取り揃えていますので、お近くにお越しの際は是非お立ち寄りください。

■案内所の主な情報サービス

●名馬の紹介(ファンだった馬の繋養先、種牡馬・繁殖牝馬の成績、現役時代の競走成績)●牧場見学の情報と案内(見学の可否、見学時間・期間など)●牧場や生産馬の紹介●せり市場の案内(開催日程や購買方法など)●競馬開催日程の案内●乗馬施設・乗馬クラブ・観光牧場の紹介●競走馬に関する書籍・参考資料・ビデオの閲覧、視聴●馬の行事・祭りの紹介●馬産地周辺の観光・交通・宿泊案内など

競走馬のふるさと千葉県案内所

〒286-0212 千葉県印旛郡富里町十倉1番地
千葉県両総馬匹農業協同組合内
TEL(0476)93-1008 FAX(0476)92-2985

■開館日／9時～16時
■休館日／土・日曜・祝日、年末年始
※8月に不定休館あり

競走馬のふるさと千葉県案内所

(社)日本軽種馬協会千葉県支部
千葉県両総馬匹農業協同組合

ごあいさつ

(社)日本軽種馬協会千葉県支部
千葉県両総馬匹農業協同組合
代表理事 **吉田照哉**

このたびは「競走馬のふるさと千葉県案内所」にお越しいただきありがとうございます。

ご承知のとおり昨今の千葉・茨城地区は、馬産地として本来の機能を果たすのが難しい状況にあります。しかし育成牧場の中心地として、その重要性があらためて見直されるようになってきました。これは、地域に根づいた伝統が、ひき続き好立地や最新の技術などの諸条件とうまく合致していることの裏づけにほかなりません。

ここにお届けする小冊子は「馬のあゆみ」と題し、われわれの先祖たちと馬との触れ合いの歴史を検証したものです。今日の競馬には直接つながるものではありませんが、伝統を掘り下げることで新たにかいま見えてくるものもあるはずです。小誌がその一助として、ひいては競馬への理解をいっそう深めるきっかけとなれば幸いです。

関東最大の馬産地として、数多くの名馬を輩出してきた千葉・茨城地区。各地に伝わる馬の風習や伝統、駿馬の質を最大限に引き出すホースマンの熟練技まで、この地域は馬産・育成に適した地の利が、今日の優駿輩出、地域発展の基盤となっています。本誌は、歴史ある千葉・茨城地域の「馬のあゆみ」を、上巻・下巻の2冊に分け、上巻では古代から明治初期までの馬と地域の関わりを、続編の下巻では、近代競馬へと続く牧場の姿を中心に、馬産の軌跡を紹介しています。

古代から近世にかけての下総台地を探訪する。

上

●関東の境界
(点線=明治以前、色分け区分=現在)

事始め

馬のルーツは5400万年前にさかのぼる。

馬の歴史をさかのぼると世界最古の馬にたどりつく。

サラブレッドは3頭の馬*から血統が繁栄。「300年ロマン」と形容されているが、馬全体の歴史からみると、それは、ほんの一瞬でしかない。

馬は、北米大陸の始新世の地層から発掘されたヒラコテリウムとよばれる動物化石が起源とされ、その後の環境変化に順応、進化を続けて現在の多彩な馬科の動物につながったといわれている。

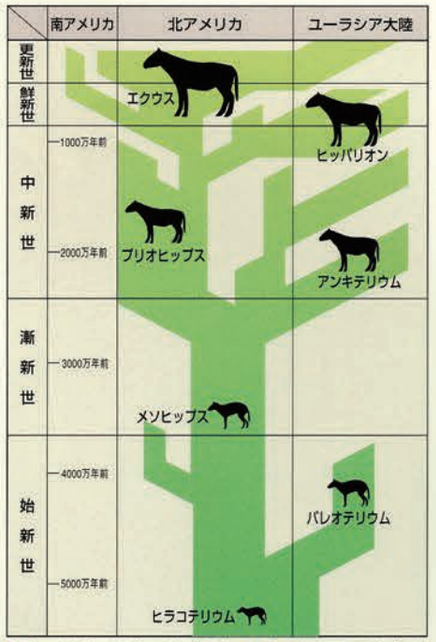
日本でも関東を中心に各地の遺跡で馬の骨が発掘されている。その調査から日本が大陸と陸続きだった時代、すでにこの地に馬がいたことがわかっているが、これらの馬はヒラコテリウムからどの程度進化が進んだものなのか、どんな経路でいつ頃来たのか、または、どんな民族によって当時の日本へ連れてこられたのかは、現在も謎となっている。

近年の研究で、日本列島における人類の生活は旧石器時代後期に始まったことが分かってきた。しかし、その時代に日本と大陸を行き来したであろう馬の足跡をたどることは大変に難しい。日本の酸性土壌が痕跡となる獣骨を溶かし消滅させているのがその要因となっている。

■馬の先祖ヒラコテリウム（エオヒップス）
北米の始新世の地層から発見されたヒラコテリウム（Hyrachotherium）は4本指でキツネほどの大きさの動物。その後発掘された3本指の同類化石から、馬科への進化をたどる先祖と認められた。4本指のものは当初、森林で若芽などを食べていたが、外敵の多い森林を離れ草原生活をするようになってから、速く逃げるために指が進化していったと推測されている。

ヒラコテリウムのレプリカ（財団法人馬事文化財団所蔵）

●馬科動物の系統図



●色／森林型（木の葉食性）　●色／層原形（草食性）

*3頭の馬／ダーレー・アラビアン、バイアリー・タ－ク、ゴルドフィン・アラビアンの3頭。三大根幹馬ともいう。

日本の馬文化は大陸から渡来してきた。

北米で発見されたヒラコテリウムが、現在の馬に最も近いエクウス（Equus）に進化を遂げようとした頃に氷河期が到来。馬の先祖たちは、牧草を求めて陸続きだったベーリング海を越えてヨーロッパやアジア大陸に渡り、ここで人類と劇的な遭遇をすることになる。

馬が人間に馴致され、家畜化されるようになるのは紀元前6000年頃。それまでの人類にとって、馬は食料であり、生皮をとるための獲物であったことが発掘された遺跡から分かってる。

中央アジアを移動する遊牧民に家畜化された馬は、やがて勢力をもつ文明に戦車や狩猟車をひかせる動力として使われるようになり、大陸で侵略や戦争が拡大し、軍事力としての馬の重要性が各部族に知れ渡ると、馬は次第に権力の象徴として祭られるようになっていく。

■馬文化の渡来
黒海から中国東北部にかけてのステップ（草原地帯）には、スキタイ人、サルマタイ人、月氏（げっし）匈奴（きょうど）など、様々な騎馬民族が遊牧生活を送っていた。このうち日本には、モンゴルや匈奴系の馬文化がもたらされたといわれている。

昭和30年（1955）3月、茨城県玉造町三味塚古墳から出土した6世紀初頭のものと推測される金銅製冠は、そんな中央アジアの文化、勢力を物語る貴重なもの。また、馬飾りのついた王冠は、日本でここでしか発見されていないことから、千葉・茨城地域にはこの時代、大陸の馬文化をもつ小国がすでに存在していて、農耕主体であった当時の地域を統治していたのではないか。さらに、こうした小国が関東以南の各地に点在し、中央アジアに習った儀礼、祭礼、宗教、言語が広められ、それが日本文化として根ざしていったのではないか、という「騎馬民族国家論」に関係する出土品としても、この王冠は注目を集めている。

■金銅製冠（茨城県立歴史館所蔵）
茨城県玉造町沖州の霞ヶ浦沿岸にある三味（さんまい）塚古墳から発見されたもので、王冠は石棺に埋葬されていた遺骸の頭部にかぶされていた。遺骸にはこのほか、両耳に耳飾り、手首の位置に丸玉、足の付近に乳文鏡、遺骸の両脇に大刀と剣のほか、勾玉（まがたま）状の装飾具も添えられていた。
これら古墳の出土物は、現在、茨城県立歴史館に展示・保存されている。

モウコノウマ（多摩動物公園）

■イエウマ
遊牧民に飼いならされた馬は「イエウマ」と分類される。イエウマは生息環境や人間によって次第に多様な系統がつくられ、現在に受け継がれる。現存する日本和種馬*とイエウマの関係は未だ謎が多いが、発掘された馬の骨のなかには、蒙古系馬「モウコノウマ」（上写真）の系統を示すものがあるという。

*日本和種馬／北海道和種馬（どさんこ）、木曽馬、野間馬、対州馬、御崎馬、トカラ馬、宮古馬、与那国馬の8種をいう。

古代史

下総の馬産は古墳時代に開花する。

農耕民族を席巻した騎馬部族国家の誕生。

紀元前2世紀後半になると、西日本の各地に豪族が出現。次第に勢力をのばして部族国家をつくりだしていく。
このことは、3世紀の中国で書かれた「魏志倭人伝」に卑弥呼の名とともに、邪馬台国をはじめとする小国らしき存在の記述から推測できるが、当時の日本に馬はいないと記されるなど、この文献には謎の部分も多い。しかし、3世紀後半の古墳時代に入ると、この謎は、現代の高度な遺跡調査・研究から次第に立証されていく。

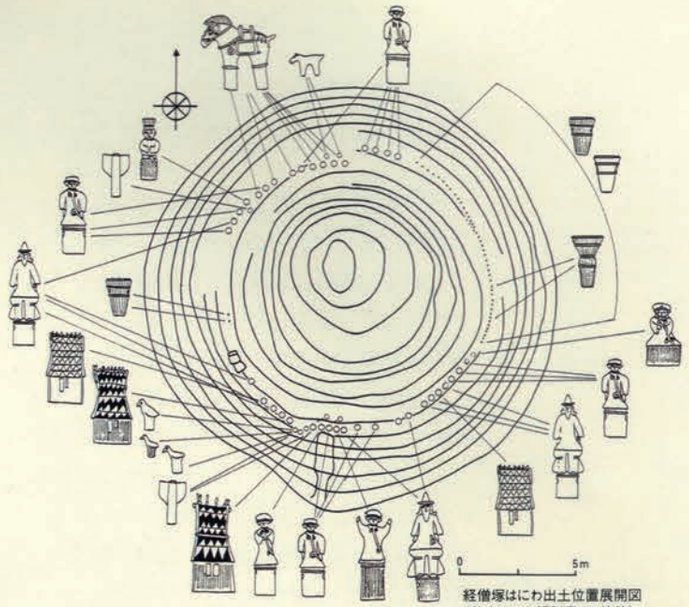
千葉・茨城地域には、部族国家の存在を示す古墳が随所に点在している。特に、九十九里海岸中央部一帯の下総台地には推定千基を超える古墳があるとされ、この地域の古代文化を象徴するものとして「芝山古墳群」の総称が付けられている。
部族国家首長の墓である古墳は、その大きさ、埋葬物等によって、現在では部族の勢力、文化、生活などの詳細がかなり正確推測できるという。

●千葉県内出土はにわ分布図
（芝山はにわ解説書より抜粋）

■芝山古墳群
4世紀半ばから7世紀初頭にかけて築造された古墳が点在。芝山古墳文化圏とも呼ばれ、この地域の古代文化が把握できるとともに、関東、大和との結びつきも推測できる貴重な存在。「はにわ」も数多く出土している。

馬はにわ（芝山はにわ博物館所蔵）

■経僧塚はにわ出土位置展開図（右図）
芝山古墳群の代表とされる殿塚、姫塚によく似ている形象はにわの代表例。1の家型は切妻形の屋根が特徴で、当時の生活様式が推測できる。2の馬（下写真）は、ほぼ完全な形で発掘されており、馬具や装飾もよく分かる。三角帽子の3男子は、腰に太刀をもつ警護の武人。両手を上げている4は巫女で、管玉の首飾りが特徴。5の女子は、黒の彩色があり、首の勾玉から推測して身分の高い婦人と考えられている。



経僧塚はにわ出土位置展開図
（芝山はにわ解説書より抜粋）

支配階級層の馬文化が地域に根づきはじめる。

大和の勢力が日本全域に及び、古代国家体制が確立する4世紀末になると、古墳は大型化し、木や草で作っていた死者への供え物も、焼き物に代わっていく。
この焼き物が「はにわ」である。
悪霊から死者を守る武器類、食料と思われる野鳥類、愛玩動物と推測される犬のほか、儀礼用に飾りをつけた「馬はにわ」も必ず埋葬されていた。その後、「人物はにわ」が作られるようになると、死者の生活を物語る屋敷、道案内する馬子、飾り付けられた数頭の馬、巫女、供え物を捧げる男女など、埋葬の儀式をそのままに再現した「形象はにわ」の古墳が登場。より詳しく当時の様子を知ることができるようになった。
また、古墳から出土された「馬はにわ」から、轡、鐙、鞍など、現在同様の馬具がすでに使われていたこと、さらに、鎧兜をつけた武人、馬を扱う農夫の存在など、馬が戦力として、生活の一部として、当時の人々に定着していたことも、出土した「はにわ」が現在に知らせている。

農夫・馬子（芝山はにわ博物館所蔵）

官牧の設置が馬産の基礎を育んでいった。

広大な土地を有する関東に国牧が開かれた。

兵部省が管理する国家の牧場は、官牧とよばれた。官牧は時代とともに整備され、兵部省に左馬寮、右馬寮ふたつの馬専門組織が設けられた平安時代には、国牧、近都牧、国飼牧、勅使牧(御牧)とよばれる4つの牧場形態で総数39を数えた。しかし、平安時代の都(現在の京都)には馬を放牧する土地がなかったため、牧の大半は都を遠く離れた関東・九州に作られていった。

この時代、相模、武蔵、上総、下総、安房、上野、下野の関東地方には、14の牧があったと記されている。

野馬込跡(成田市南三里塚)

白村江での大敗が馬産名振興を拡大させた。

「古事記」「日本書紀」などの文献には、支配階級の持ちものとして馬が登場するが、大化改新(645)以後、交通機関として馬が制度に組み込まれてからは、馬は庶民にも身近な動物として一般化していく。

白村江で新羅と唐の騎馬連合軍に大敗した天智天皇の663年、国家は軍事力としての馬産を重視。大宝元年(701)の「大宝律令」で馬の拡充を図っていった。この布告から本格的な牧が誕生。広く一般にも馬が供給されていくことになる。

優美な駒牽の儀が民間に馬をもたらした。

官牧のうち、国牧は主に軍馬養成、近都牧は政府に進上された馬の管理、国飼牧は国飼御馬とよばれた皇室用に献上された馬を繋養、そして勅使牧は、皇室用の馬を放し飼いにする牧場であった。

近都牧の馬の用途は不明だが、国牧の馬は兵馬に、国飼牧の馬は競馬・騎射など、皇室の行事・儀式に使われていたことが記録に残っている。

勅使牧では馬が2歳になると検印され、5歳に全馬を選別して良馬は貢馬として皇室に献上された。この選別の儀式を駒牽という。駒牽当日は、天皇、親王、大臣等が見守る紫宸殿の前庭で、左・右馬寮の役人に騎乗させ、その馬の善し悪しを吟味するという、華やかなものだった。
また、この選別にもれた馬は駅伝馬など交通用として使われたほか、頭数が多い場合には民間にも払い下げられたこともあり、この時代から一般でも馬の飼養が可能となったことが想像できる。

武士勢力の台頭が官牧を消滅させていく。

平安時代の律令国家は、関東・東北地域まで支配体制が及ばなかったためか、9世紀にはこの地域で農民・浪人で形成された豪族が出現した。豪族は軍事貴族と結びついて大規模な騎馬豪族となり、当時の国府と対立していった。これが武士集団の原型。下総でふたつの官牧を運営していた平将門の反乱(935)も、こうした武力勢力を物語るものだ。

■幕府直轄時代の牧
武士勢力が掌握した官牧は、私牧(しまき)と呼ばれるようになり、私牧の周辺を支配した武士は領主制を展開する。しかし、度重なる合戦の後に、これら私牧は幕府直轄の牧となっていく。
成田名所図絵に描かれる「下野牧野馬執の図」には、幕府直轄牧時代、放牧した馬を集め、幕府献上馬として選別されるまでの過程を、5枚にわたって詳しく描かれている。

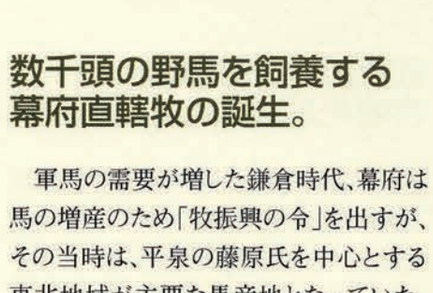
成田名所図絵・野馬込の風景図(成田山霊光館所蔵)

数千頭の野馬を飼養する幕府直轄牧の誕生。

軍馬の需要が増した鎌倉時代、幕府は馬の増産のため「牧振興の令」を出すが、その当時は、平泉の藤原氏を中心とする東北地域が主要な馬産地となっていた。このことは、室町時代に顕著となり、合戦絵巻や糠部馬印之図など、現存する多くの史料が東北馬の優秀さを描いている。

しかし、馬の輸入・改良、馬術などが積極的に行われるようになる江戸幕府八代将軍・徳川吉宗の時代になると、幕府は直接牧の経営に乗り出すようになる。

下総台地に駿馬の群れが駆けめぐる。



宇治川大合戦絵の一部（岩手県立博物館所蔵）

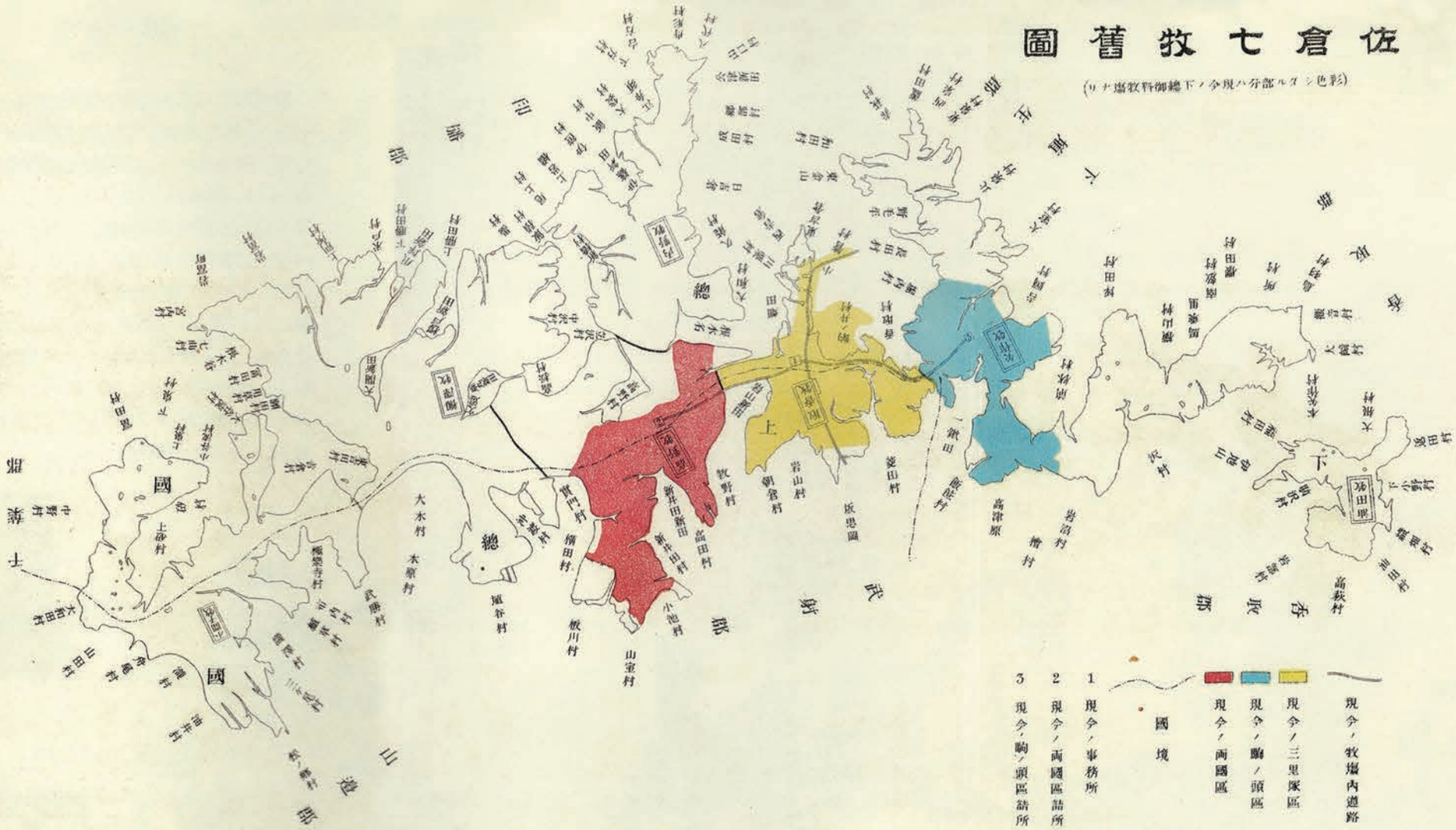
幕府の軍事力を支えた千葉県内の牧。

吉宗によって開かれた幕府直轄牧は、下総の小金牧、佐倉牧、安房の嶺岡牧、甲州の甲府牧の4牧。各牧はさらに細かく区分され、佐倉牧の場合、小間子牧、柳沢牧、高野牧、内野牧、取香牧、矢作牧、油田牧の7つから構成され、「佐倉七牧」（上図参照）と呼ばれていた。

●佐倉七牧の馬印（千葉県両総馬匹農業協同組合所蔵）

直轄牧はいずれも野馬放牧で行われ、放牧地は現在の牧柵の役割をもつ、高さ2間（約3.6m）の野馬土手で他の土地と区分されていた。

天明8年（1788）の野馬方役所届によると、佐倉七牧では総数で約3,000頭もの野馬が放牧されていたことが記されている。これらの馬は、毎年行われた「野馬捕り」で軍事用、幕府役人用に選別され、下馬は運搬・交通用、農耕用として一般にも払いざられていたといわれている。



佐倉七牧配置図（千葉県両総馬匹農業協同組合所蔵）

広大な敷地をもつ牧は牧士と地域の人々が支えた。

幕府の牧管轄役所は、虎ノ門にあった御野馬方役所だったが、牧を直接管理したのは「牧士」とよばれる苗字、帯刀を許された武士であった。

牧士の仕事は、数千頭に及ぶ馬の移出入、捕馬、病馬・へい死馬の処理、馬数帳の整理、野馬方役所への報告など多岐にわたることから、後に、平牧士、牧士見習、野先、勢子廻、網掛、捕手など、牧士頭を中心とする制度で広大な牧を管理するようになった。また、牧に隣接する村は「野付の村」とし、野馬土手の修復や植林・伐採作業のほか、捕馬の時期など、牧に人手が必要なときに人足を徴発できる、地域作業的なきまりも設けていたという。

成田名所図絵・野馬込の風景図（成田山霊光館所蔵）

■牧士羽織（社団法人藤崎牧士史料館所蔵）

牧士は将棋の駒をシンボルマークとしていた。これは「馬の駒」にかけたものだといわれている。また、牧士と平牧士（牧士補佐）は世襲によって代々受け継ぐことが習わしとなっていた。

馬事文化

馬産の伝統が地域に根ざす。

馬に対する厚い信仰が伝統として受け継がれた。

古墳時代の「馬はにわ」に代表されるように、日本において馬は古来から他の家畜と違う役畜・財物として貴重な存在であった。また、死者を祀り敬うための供え物として、この世に降臨する神々の召したもう聖なる動物として、祭礼・行事・伝説など、様々な形で地域の文化にとけ込んでいった。

油田馬頭観音（千葉県山田町）

奈良時代に行われていたという生馬の奉納は、干ばつ・冷害などの自然災害を治めるために神霊に捧げたもので、その風習が現在の入学祈願、商売繁盛を願う絵馬や、五穀豊穣を祈願する初午祭などの行事となって息づいている。

また、馬が農耕や交通の動力として無くてはならない存在だった時代には、母屋に厩をおくなど、常に馬とともに生活していたことから、馬頭観音や馬魂碑など、祈願ではなく家族同様の愛着から馬を葬る習慣が定着。八幡馬に代表される民具や左馬などの縁起事も、こうした馬との生活から根づいていった。

さらに、千葉県に展開された佐倉七牧は、後に初富、二和、三咲、豊四季、五香、六実、七栄など、開墾が始められた地域順に番号が付けられ、現在に至るなど、馬と地名の関わりも歴史的に興味深い。

■吉保八幡神社の流鏑馬（鴨川市）
幕府直轄の嶺岡牧から発展した鴨川市。毎年9月29日に行われる吉保八幡神社の例大祭では、安房の領主が領民の武芸奨励のために行ったという流鏑馬が、神事として現在に伝えられている。

武士社会の秘技が地域住民に浸透していった。

平治元年（1159）に起こった源義平と平重盛の戦い（平治の乱）は、騎馬勢力を象徴する出来事だった。以後、平安後期から室町時代にかけての武士社会では、合戦の作法として流鏑馬、笠懸、犬追物、草鹿など様々な弓馬術が誕生。江戸幕府の時代になると、これら弓馬術は武家諸法度で「文武弓馬の道」とされるようになっていく。

諸藩に騎馬武術が浸透すると、藩士の指揮を高めるための武術競技の公開、神社への奉納などから、庶民にも騎乗や馬術が定着。武士道としての弓馬術は、一般庶民によって神事・祭事として受け継がれていくようになる。

加賀美流騎馬打球（青森県八戸市長者山新羅神社）

油田馬頭観音に奉納された絵馬（千葉県山田町）

近現代史

維新の波は下総の台地も大きく変えた。

幕末の混乱期に一頭の名馬が導入された。

徳川吉宗の時代、輸入馬が幕府直轄牧に導入されたこともあったが、当時は品種改良の知識・技術に乏しく、これといった成果をあげずに終わっていた。しかし、文久3年(1863)、フランス養蚕業の危機救済のために蚕を贈ったわが国への礼として、ナポレオン3世から当時の将軍・徳川家成にアラブ馬が寄贈された。このアラブ馬26頭の中の一頭、高砂号は、後の下総御料牧場の祖として大きな功績を残すことになる。

新政府の殖産興業推進は馬匹改良の基礎を築く。

明治元年(1868)、廃退した国内を建て直し、諸外国の侵略行動に対処すべく、明治政府は富国強兵策を推進。大久保利通内務卿は、近代牧畜推進を政府に提言するとともに、本格的な牧場建設のための用地選定作業に入った。この時、すでに窮民授産のための開墾地として払い下げとなっていた佐倉七牧だったが、かろうじて取香牧だけは旧佐倉牧士が管理する官有地として残されていた。

この旧佐倉牧士の努力により、明治8年(1875)、取香牧の地に下総牧羊場の開設が決定することになる。

大隈重信に宛てた「牧産建言書」
(成田市三里塚御料牧場記念館)

芝山仁王尊観音教寺にある吾妻号の碑(千葉県芝山町)

「馬のあゆみ」略年表

6000万～5400万年前	馬の先祖、4本足のヒラコテリウム(エオヒップス)が生息
1000万～500万年前	指が一本に進化した(蹄をもつ)エクウス登場
170万～1万年前	馬の先祖たちアメリカ大陸からユーラシア大陸に移動
紀元前6000年前頃	ユーラシア大陸ステップ地帯で馬の家畜化が始まる
紀元前2000年前頃	車輪をつけた荷馬車が遊牧民族により広められる
紀元前1000年前頃	騎馬集団が大陸に現れ、馬は戦力として使われはじめる
紀元前700年前頃	騎馬民族スキタイ人が台頭する
紀元前100年前頃	戦いに破れたスキタイ人はローマ帝国の支配下となる
紀元～3世紀頃	「魏志倭人伝」によって、当時の日本が記述される
3世紀後半頃	古代日本の小国を示す古墳がつくられはじめる
4世紀頃	大和朝廷の統一が進む
6世紀初頭	金銅製冠をもつ騎馬部族の集落がみられる(三味塚古墳)
593	聖徳太子摂政となる
645(大化元)	大化改新。駅馬・伝馬などが交通手段として配置される
663	白村江の戦い。新羅・唐の騎馬軍団に日本軍大敗する
701(大宝元)	「大宝律令」布告。厩牧令など馬政が制定される
710(和銅3)	平城遷都。この時代から官牧の基礎がつくられる
808(大同3)	官牧の中核となる内厩寮が左馬寮、右馬寮に改組される
811(弘仁2)	「大政官符」で種牡馬の乗用が禁じられる
935(承平5)	平将門の乱。国司と対立したこの乱は関東全土に拡大
1159(平治元)	平治の乱。この時代から東北地域の馬産が広まる
1192(建久3)	源頼朝征夷大将軍となる。騎馬・弓射が武芸として確立
1614 (慶長19)	下総佐倉牧・小金牧の野間奉行に綿貫十右衛門が任命される
17189(享保4)	徳川吉宗、下総の佐倉牧七牧を直轄牧として開設
1720 (享保5)	幕府、朝鮮・唐の馬を輸入。後にオランダ、ペルシャからも輸入される
1722(享保7)	牧改正により佐倉七牧のうち小間子牧、取香牧、矢作牧、油田牧の四牧は小金の野馬奉行所管轄となり、嶋田、藤崎、丸瀬、佐瀬、今井、鈴木の牧士6名が配置される。内野牧、高野牧、柳沢牧の三牧は佐倉城主の預かりとなり、三橋、四宮、並木、京増の4名が牧士となる
1833(天保4)	佐倉四牧の藤崎勝左衛門と丸瀬平衛が本役牧士に任命される
1867(慶応3)	徳川慶喜の大政奉還。王政復古の大号令を宣言
1868(明治元)	幕府消滅。明治政府樹立。江戸を東京と改称
1869(明治2)	富豪出資者の開墾会社設立。窮民授産開墾事業開始
1871(明治4)	藩政消滅。佐倉七牧は印旛県に引き継がれる
1872(明治5)	開墾会社解散。印旛県が窮民授産開墾を引き継ぐ
1874(明治7)	25人いた旧佐倉牧士と見習は、藤崎勝左衛門藤崎忠誠、佐瀬長左衛門、根本鉄平、篠原権平の5人となり、取香牧取締役に任命される
1875(明治8)	大隈重信に宛てた大久保利通内務卿の「牧畜建言書」により、新政府は東京勧業寮試験場内に牧羊開業取調掛を置き、牧場用地の選定作業を開始。大貫山、女化の原、那須野などの候補地から、交通利便・整備状況等から同年8月、旧取香牧の一体を牧羊地(後の下総御料牧場)として決定する

《参考文献》
■富里村史通史／1981／千葉県富里町■馬の化学／1986／日本中央競馬会・競走馬総合研究所／講談社編■芝山はにわ解説書／1988／芝山はにわ博物館■馬／1989／藤田秀司／秋田文化出版社■馬の文化叢書(1)／1993／森浩一編／(財)馬事文化財団■馬の文化叢書(4)／1993／林秀夫編／(財)馬事文化財団■騎馬民族と日本人／1994／武光誠／PHP研究所■馬の文化叢書(2)／1995／高橋富雄編／(財)馬事文化財団■馬の文化叢書(3)／1995／網野善彦編／(財)馬事文化財団■馬と人間の歴史／1996／末崎真澄／(財)馬事文化財団■鎌倉の武士と馬／1998／(財)馬事文化財団・馬の博物館